

松江市文化財調査報告書 第108集

村道役場深原線(桑下)道路改良工事
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

岩屋口横穴墓群

平成18(2006)年12月

島根県松江市教育委員会

村道役場深原線(桑下)道路改良工事
予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書

いわ や ぐち よこ あな ほ ぐん
岩屋口横穴墓群



平成18(2006)年12月

島根県松江市教育委員会

例　　言

1. 本書は、八雲村建設課の依頼を受けて、八雲村教育委員会が昭和58年度（1983年）に実施した村道役場深原線（桑下）道路改良工事予定地内の埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

なお、報告書の作成にあたっては、松江市と合併する以前の平成16年度に作成し、印刷については合併後の平成18年度に行った。従って、本文の一部に合併前の内容の記述があることをお断りしておく。

2. 本書で扱う遺跡の所在地は次のとおりである。

岩屋口横穴墓群　島根県松江市八雲町西岩坂4139番地1、4140番地1

3. 現地調査期間は次のとおりである。

昭和58年9月24日～10月8日

4. 調査組織は以下のとおりである。

〔昭和58年度〕現地調査

調査主体　八雲村教育委員会　教育長　小松正雄

調査指導者　井上貴央（現：鳥取大学医学部教授）

調査担当者　宮本徳昭（社会教育係）

〔平成16年度〕報告書作成

調査主体　八雲村教育委員会　教育長　泉　和夫

事務局　三好　淳（教育次長）、藤田節子（嘱託）

調査担当者　川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員　田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺物整理　高尾万里子

5. 本書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言、ご協力、資料の提供を頂いた。記して感謝の意を表する。（敬称略）

西尾克己（現：島根県教育庁文化財課）

井上貴央（現：鳥取大学医学部教授）

6. 本章の編集と執筆は、昭和58年度調査の記録を基に上記の協力者の助言を得ながら川上が行った。

7. 本書で使用した方位は磁北を示す。

8. 本書に掲載した「第1図：岩屋口横穴墓群の位置と周辺の横穴墓（1:25,000）」は「八雲村管内図」を使用し、「第2図：開発範囲と岩屋口横穴墓群（1:1,500）」は八雲村建設課作成の工事図面を墨書きして使用した。

9. 「第1図：岩屋口横穴墓群の位置と周辺の横穴墓（1:25,000）」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の『増補改訂島根県遺跡地図I』（出雲・隠岐編）2003年3月と対応している。

10. 本遺跡出土遺物及び調査記録は松江市教育委員会で保管している。

本文目次

第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯と経過	2
第3章 調査の成果	3
第4章 まとめ	13

第1章 遺跡の位置と環境

八雲村は島根県の東部、松江市の南にあたり、北と西を松江市、南西部は大原郡大東町、南東部は能義郡広瀬町、北東部は八束郡東出雲町に囲まれている。村の規模は東西8km・南北10km・面積約55.41km²で、総面積の80%以上が山林で占められている。この山間に谷が形成されているが、これらはすべて意宇川本支流の浸食堆積作用によるものである。大きな谷に意宇川、桑並川、東岩坂川、川原川が形成した谷がある。平野はあまり発達をみせず、川が合流する村の北側（意宇川の中流域）部分に盆地状に展開している。遺跡はこの谷と平野を取り囲む部分に集中し、下流に向かうほど密集している。また、これまでの調査では古墳時代のものが顕著である。

今回調査を行った岩屋口横穴墓群は桑並川左岸の低丘陵に位置しており、水面からの比高差は約5mを測る。この横穴墓群の発見は古く、明治年代の桑並道路新設の際に横穴の一部が破壊されたという記録が残っている。また、『島根県史』大正12年調査の古墳種別一覧の中に「古墳一同 大字西岩坂字岩屋口 祝部土器」「墳穴一同 同字岩屋口山林 土器類」とあるのは何れもこの岩屋口横穴墓群のことと思われる。

昭和39年の村道幅員拡張工事中、道路側面の山をカットして土石をショベルカーで積載中にも多数の遺物が発見されている。道路に面した2穴（1・2号穴）が破壊されており、人骨の完全なものが4～5体分出土したというが、青木寺に再埋葬されており詳細は明らかでない。

周辺の遺跡としては、北方350mの斜面に大日堂横穴墓群（49）、岩坂神社横穴墓群（50）が位置している。大日堂横穴墓群は4穴が確認されており、いずれも丸天井型のものである。遺物には大谷綱年出雲6期と考えられる低脚無蓋高杯（A6型）1点が採取されている。岩坂神社横穴は1穴が確認されており、遺物としては大日堂横穴墓群と同じ型式の高杯1点が出上している。これら3つの横穴群は桑並川に面した東向斜面に位置しているが散在しており、群としてみるとできぬい。なお、『島根県史』古墳種別一覧の「群集古墳-岩坂村大日墳穴多数アリ、白骨等ヲ発掘ス」とあるのは大日堂横穴墓群のことと思われる。

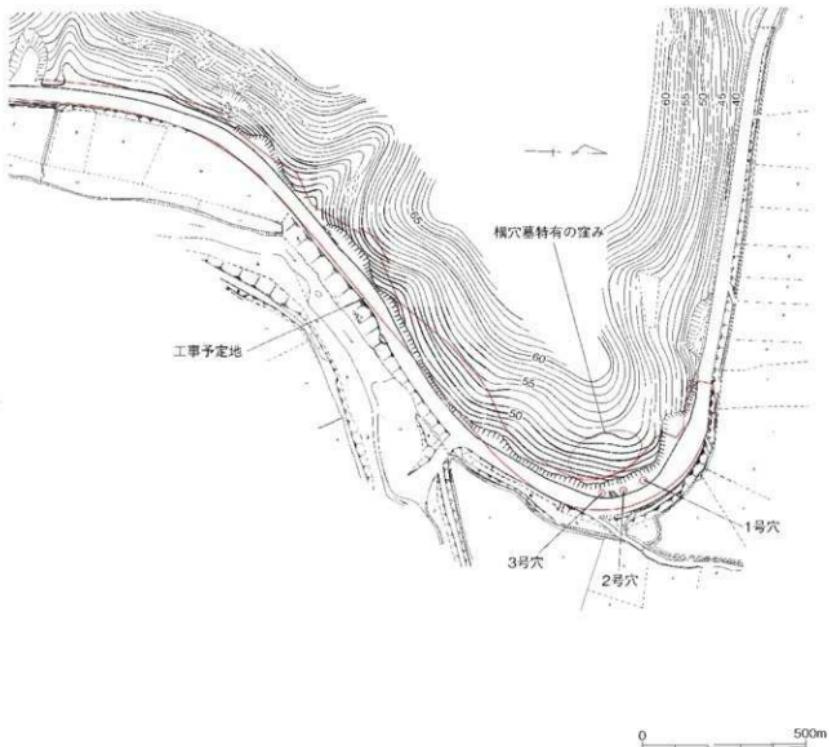


第1図 岩屋口横穴墓群の位置と周辺の横穴墓 (1:25,000)

- | | | | |
|-------------|--------------|-------------|------------|
| 6. 安田横穴墓群 | 7. 岩屋口横穴墓群 | 18. 高野横穴墓群 | 37. 北折原遺跡 |
| 39. 外輪谷横穴墓群 | 44. 細田横穴墓群 | 45. 神定寺横穴墓群 | 47. 折原横穴墓群 |
| 49. 大日堂横穴墓群 | 50. 岩坂神社横穴墓群 | | |

第2章 調査に至る経緯と経過

昭和58年4月15日、八雲村建設課より村道役場深原線（桑下）道路改良工事予定地内における埋蔵文化財の有無確認調査依頼が八雲村教育委員会宛に提出された。依頼を受けた教育委員会では直ちに対象地の分布調査を実施した。工事予定地内には岩屋口横穴墓群が存在しており、ここを中心には踏査を試みたところ、未開口の横穴1基（3号穴）と昭和39年に実施された幅員拡張工事中に破壊された横穴の玄室2基（1・2号穴）が存在することを確認した。また、開発予定地と民地との境界には横穴墓特有の落ち込みが多数存在することも確認している。4月22日に分布調査結果を回答し、この結果を基に遺跡保護の協議を行ったが計画変更は困難との結論に達し、八雲村教育委員会が主体となり発掘調査を行うこととなった。6月9日に文化財保護法第57条の3の規定による通知を受け、6月16日に文化庁長官宛に進達を行った。この後、7月8日に文化財保護法第98条の2第1項を通知し、9月24日から10月8日の間に現地調査を実施した。



第2図 開発範囲と岩屋口横穴墓群 (1:1,500)

第3章 調査の成果

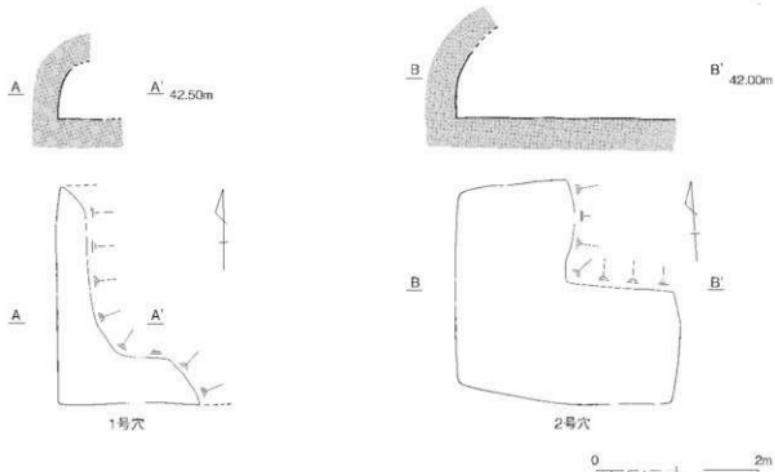
今回の岩屋口横穴墓群の発掘は、昭和39年に破壊された横穴の玄室2基（1号穴・2号穴）と未開口の横穴1基（3号穴）の調査を行った。横穴の呼称は一番北側（河川下流側）が1号穴、中央が2号穴、南側が3号穴である。玄室床面の標高は3号穴が一番高く、次いで1号穴、2号穴の順番である。また、3号横穴の更に高い位置にも横穴特有の落ち込みがあることが昭和58年の分布調査結果報告に記載されている。昭和39年の村道幅員拡張工事中に採取された遺物は、1号穴・2号穴出土遺物として保管されてきたが、どの遺物がどの横穴から出土したものか判らない。また、人骨の完全なものが4～5体分出土したというが、青木寺に再埋葬されており詳細は明らかでない。この他、遺物には中世須恵器5点、瓷器系壺類胴部の破片6点も含まれており、横穴墓以外の遺構も存在していたと思われる。このため遺物は「昭和39年出土遺物」として一括して掲載している。

1. 岩屋口横穴墓群1号穴（第3図）

1号穴は東に向かって突き出した尾根の先端部分に位置しており、今回調査を行った3基の中では一番北側に存在する。現状は道路法面となっており、玄室床面の一部が僅かに残存している。玄室の平面プランは方形と推定されるものであり、現状での規模は南北2.65m、東西1.75mを測る。玄門部は東、南、北方向のいずれかに取り付けられていた可能性があり、東向の斜面であることから想定すると3号穴と同じ東向きに開口していたと思われる。玄室床面での標高は42.20mを測る。

2. 岩屋口横穴墓群2号穴（第3図）

2号穴は1号穴の南側5.82mを測る場所に位置しており、今回調査を行った3基の中央にあたる。玄室の7割程度が残存しており、平面プランは方形を呈する。規模は南北2.25m、東西2.70m、玄室床面での標高は41.50mを測る。玄門部は地形等から玄室の北か東側に取り付けられていたと考えられ、東向の斜面であることから想定すると3号穴と同じ東向きに開口していたと思われる。



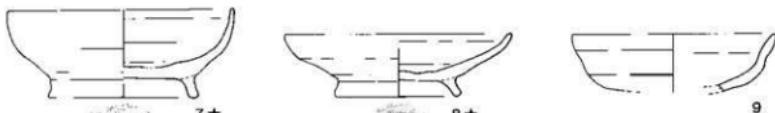
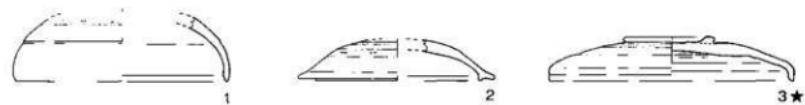
第3図 岩屋口横穴墓群1号穴・2号穴実測図 (S=1/60)

昭和39年採取遺物（第4・5図）

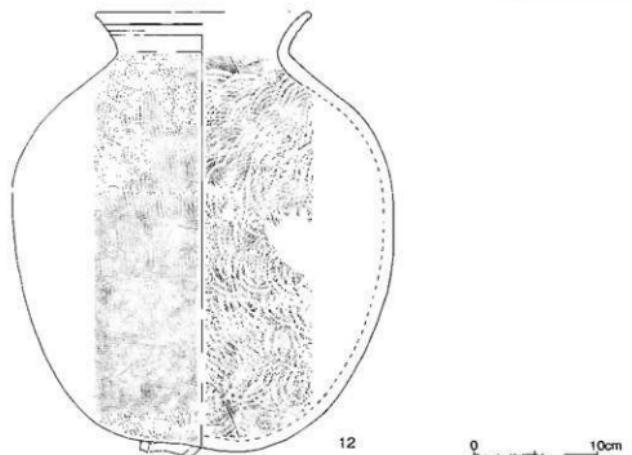
ここでは昭和39年4月17日、道路幅員拡張工事の際に採取された遺物を掲載する。この時採取された遺物はコンテナ約4箱分ほどであるが、どの遺物が何処から出土したものか判らない。但し、第4図3・5・6・7・8については、にぶい黄橙色の付着物がこびり着いており、玄室内の人骨付近に置かれていたものと考えられる。また、掲載した遺物の中で第4図4・9・11については実物が保管されていない。このため、「八雲村の遺跡」に掲載されている実測図を净書して使用した。

1～4は須恵器壺蓋である。1はナデを主体として肩部の突帯が表現されており、口縁端部内面には形成が加えられ緩い段状に仕上げられている。調整は天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。口径は13.0cmを測る。時期は大谷編年出雲3～4期頃と考えられる。2は天井部外面に回転ヘラケズリが施されており、器高も低いことから蓋とした。II縁部内面に低いかえりをもち、口径は10.0cmを測る小型のものである。出雲6期。3は口縁端部が下垂し、頂部に輪状つまみをもつものである。頂部の切り離しはつまみ部の中心までナデが施されており、不明と言わざるを得ない。II径15.0cm、器高2.7cm、つまみ部径5.5cmを測る。出雲7～8期。4は頂部に宝珠状のつまみをもつものである。現物が保管されていないため詳細は不明である。5～8は須恵器壺身である。5・6は低い立ち上がりをもち、小型化したタイプのものである。法量は5がII径9.0cm、器高3.7cm、最大径11.4cm、6がII径9.6cm、器高3.5cm、最大径11.6cmを測る。A8型の壺蓋に伴うものである。出雲6期。7・8は底部に「ハ」の字状の高台をもつものである。7は内湾気味に立ち上がり、口縁が上方へ向け真っ直ぐ伸びる。口径13.9cm、器高5.4cm、高台径9.1cmを測る。8は大きく開き気味に立ち上がり、口縁端部が若干内湾するものである。口径13.8cm、器高3.9cm、高台径7.7cmを測る。何れも底部の切り離しには、静止糸切りが施されており、時期は出雲8期に含まれるものである。9は須恵器無蓋高壺である。壺部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で若干外傾する。調整は壺部外面に1条の沈線が施されている。口径12.6cmを測る。現物が保管されていないため詳細は不明である。10は須恵器長頸瓶である。肩にやや張りをもつものであり、底部には「ハ」の字に開く高台が貼り付けられている。肩部の2カ所にはボタン状の粘土が貼り付けられており、この位置に浅い沈線が巡る。底部の切り離しは糸切りのようにも見えるが、高台の中心部までナデが施されており不明と言わざるを得ない。高台径8.3cmを測る。11は提瓶である。II縁部は大きく外反気味に開き、端部に平坦な面をもつ。把手は痕跡化し、瘤状になっている。現物が保管されていないため詳細は不明である。12は須恵器の壺である。やや歪な楕円形の体部に外反する口縁をもつ。底部外面には壺片が溶着している。II径17.5cm、器高36.1cm、胴部の最大幅31.0cmを測る。13・14は須恵器横瓶である。13はII縁部が外反し、端部に凹面をもつ。口縁は楕円形を呈し、口径12.4×13.5cmを測る。14は楕円形の胴部をもつものであり、口縁部は外反して口縁端部は平坦に仕上げられている。口径14.2cm、器高29.1cm、胴部最大幅46.0cmを測る。15～17は須恵器壺蓋類口縁部の破片である。II縁端部には形成が加えられ肥厚されている。16・17の外面には波状文が施されている。口径は15が小片のため不明、16が40cm、17は小片のため径の復元は不正確であるが42cm前後を測る。18は中世須恵器壺蓋類口縁の破片である。外反する口縁をもち、体部外面に格子状のタキが施されている。II径18.2cmを測る。

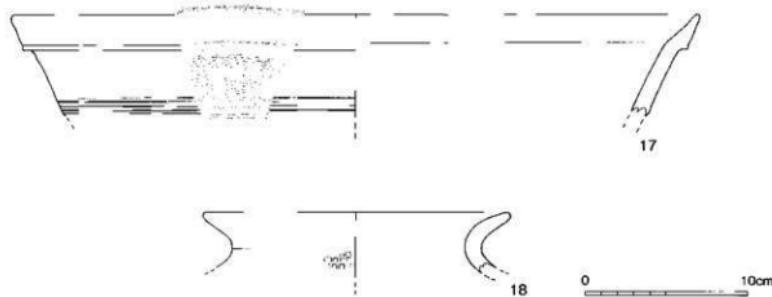
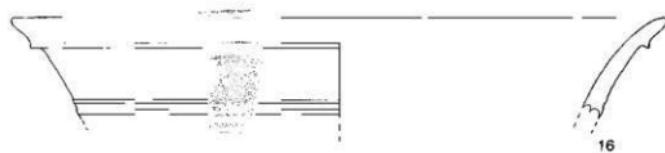
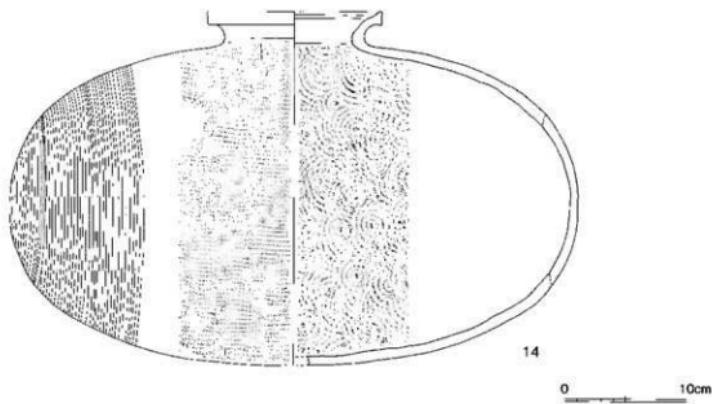
この他、小片のため実測できなかったが須恵器の予持ち壺が出土している。村内では大谷古墳群でしか確認されておらず、今回が2例目の出土となる。



★印は玄室内出土の遺物と考えられる。



第4図 昭和39年採取遺物実測図（廻1/4・その他1/3）



第5図 昭和39年採取遺物実測図（横瓶1/4・その他1/3）

3. 岩屋口横穴墓群 3号穴（第6図）

3号穴は、北へ向かって伸びる主尾根の一部が東へ向かって突き出す場所の東向き斜面に位置している。今回調査を行った3基の中では一番南（河川上流）側にあたる。玄室床面でのレベルは約43.35mを測り、開口方向はS-60°-Eの東南東方向である。

前庭部

いわゆる「マサ土」の地山を穿って真っ直ぐに伸びる長方形の前庭部を作り出している。前庭部手前側は道路法面で削られており、現状での規模は床面幅105~110cm、長さ289cmを測る。床面は前庭部奥側が高く、前方に向け僅かに傾斜している。

遺物は須恵器が多数出土している。この中で出土地点が特定できたものに第10回31の壺蓋と第10回36の長頸瓶がある。36の長頸瓶は前庭部手前側の地山直上からの出土であり、横穴の築造時期に近いものと思われる。31の壺蓋については第8層の淡褐色土層より出土したものであり、初葬段階のものではない。この層がどのような堆積をしていたか判然としないが、追葬か墓前祭祀に関連したものと思われる。

羨道・玄門部

意宇型の横穴墓と考えられるが、床面では羨道部と前庭部に境界がない。このため玄門から前庭部にかけて天井部が残っている部分を羨道とした。規模は幅110cm、奥行約75cm、高さ104cmを測り、横断面形はほぼ正方形を呈する。羨道部の奥壁は中央に玄門が開口する。

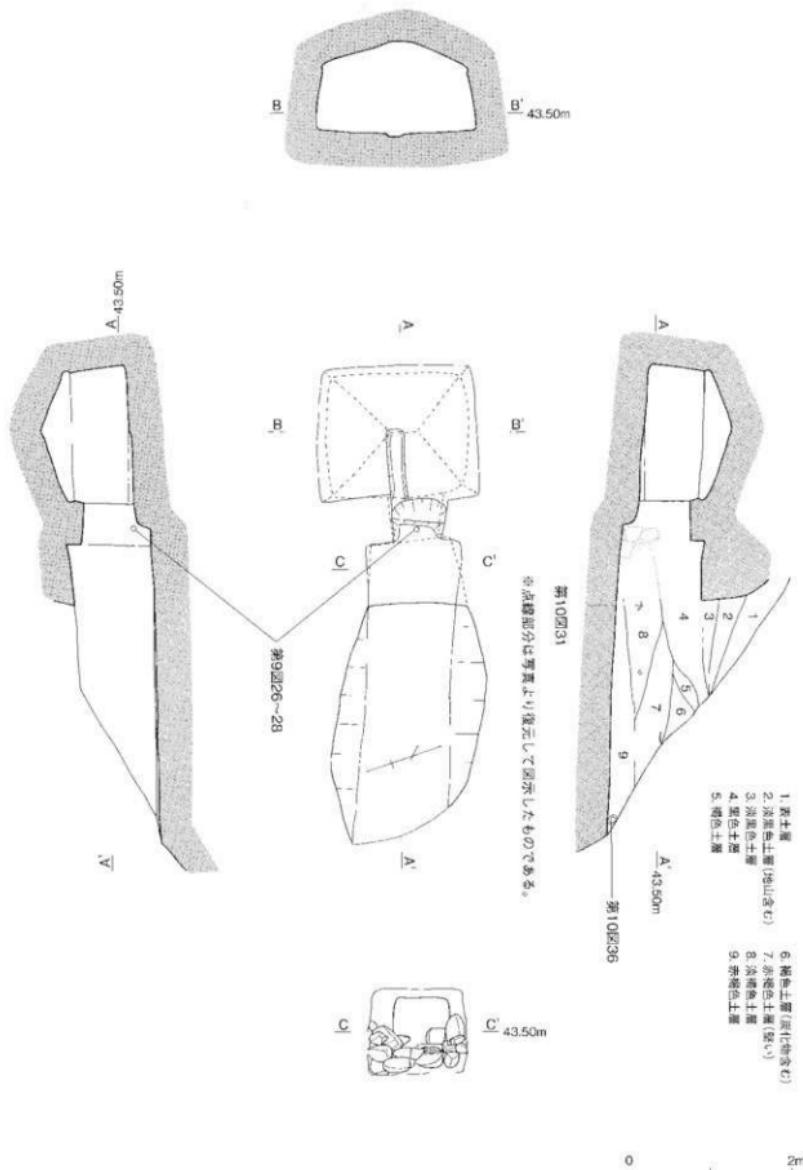
玄門の規模は長さ55cm、幅は羨道部側で50cm、玄室側で75cmと奥に向かって広がる平面形である。高さは65~85cmを測り、横断面形はほぼ正方形を呈する。床面のはば中央が段状に仕上げられており、高低差は16.5cmを測る。閉塞用のためと考えられ、この手前には人頭大の円礫が積まれていた。本来、この閉塞石は玄門天井部の高さまで積まれていたと思われるが、最終進入時と考えられる第4層により、上半分が取り除かれていた。玄室側の床面は浅く掘り深められており、これがそのまま玄室内的排水溝へと続いている。

遺物は、閉塞石を取り除くと壺蓋1点（第9回26）と壺身2点（第9回27・28）が玄門前方の一段低くなった位置にまとまった状態で置かれていた。床面より浮いた状態での出土であり、追葬時に供献、或いは移動されたものかもしれない。

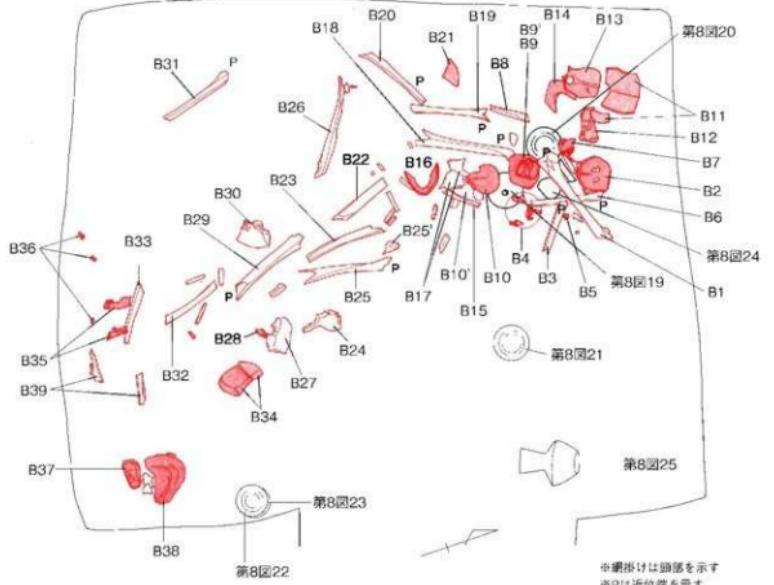
玄室

玄室の規模は高さ76~108cm、奥行きが162cm、幅は玄門側で190cm、奥壁側で175cmと奥壁側が短い台形状を呈している。玄門は玄室の中央でなく、前庭部側から見てやや右に寄った場所に取り付けられている。断面は家形、天井部は四注式で平入りに加工されている。頂部には長さ36cmに亘り大棟が表現されており、四壁と天井部の境界には軒が巡る。四壁は内側にやや傾斜しながら立ち上がり、天井部へ続く。床面のはば中央には溝が掘り込まれており、玄門へと続いている。

玄室内からは須恵器7点が出土している。これらはほぼ床面からの出土である。この内、壺蓋19・21と甕21については南-北方向に帶状に散在した人骨下からの出土である。また、壺身22・23は天地逆さまに重ねられた状態で出土している。位置関係は22が上側、23が下側である。人骨は成人2体以上と子ども1体分以上が出土したという記録が残っている。



第6図 岩屋口横穴墓群3号穴実測図 (S=1/60)



第7図 3号穴玄室内遺物出土状況実測図 (S=1/30)

0 1m

第1表 3号穴玄室内出土人骨一覧表

番号	部位	備考	番号	部位	備考	番号	部位	備考
B1	大腿骨(左)	18と対	B13	後頸骨	第1頭蓋	B26	大腿骨(右)	29と対、男?
B2	前頭骨		B14	頭蓋骨	第2頭蓋	B27	脛骨(右)	30と対
B3	脛骨(左)	20と対、女	B15	桡骨(右)		B28	鎖骨(右)	-
B4	雑骨、前頭骨片		B16	下頸骨		B29	大腿骨(左)	26と対、男?
B5	歯牙	3本	B17	肩甲骨(右)		B30	脛骨(左)	27と対
B6	脛骨(右)	23と対、女	B18	人腿骨(右)	1と対、女	B31	脛骨(右)	22と対、男?
B7	上顎骨		B19	大腿骨(左)	32と対、子供	B32	大腿骨(右)	19と対、子供
B8	大腿骨(右)		B20	脛骨(右)	3と対、女	B33	上腕骨	男?
B9	側頭骨		B21	骨片		B34	脛骨(右)、前頭骨	第4頭蓋
B9'	頭頂骨(左)	第2頭蓋	B22	脛骨(左)	31と対、男?	B35	下頸骨	
B10	前頭骨	第2頭蓋	B23	脛骨(左)	6と対、女	B36	歯牙	
B10'	衝		B24	脛骨(右)		B37	側頭骨	第3頭蓋
B11	頭頂骨	第1頭蓋	B25	大腿骨(左)	女	B38	頭頂骨、前頭骨	第3頭蓋
B12	側頭骨	第1頭蓋	B25'	人腿骨、骨頭	女	B39	上腕骨?	

玄室内出土遺物（第8図）

遺物は総て須恵器である。19～21は坏蓋とした。19はかえりをもつタイプのものであり、頂部には乳頭状のつまみをもつ。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、天井部内面の仕上げにナデが施されている。小型のものであり、法量は口径8.4cm、器高2.85cm、最大径10.9cmを測る。C1型。20は器高が低いことから坏蓋として図示したが、蓋なのか、身なのか判然としない。口縁端部内面にかえりをもつタイプのものであり、調整は天井部外面にヘラオコシ後、ナデが施されている。小型のものであり、法量は口径8.4cm、器高2.5cm、最大径11.0cmを測る。21は天井部と体部の境がなくなり、全体に丸みを帯びている。調整は天井部のややドがった位置に、ヘラオコシの際に工具が当たったと考えられる砂粒の動きが観察できる。また、天井部内面の仕上げにはナデ調整が施されている。法量は口径10.5cm、器高3.65cmを測る。A8型。22・23はC1、C2型の坏蓋に伴う坏身として図示した。22はやや丸みをおびた底部より体部が内湾気味に立ち上がっている。調整は底部外面に回転ヘラケズリ、底部内面の仕上げにはナデが施されている。法量は口径9.5cm、器高3.7cmを測る。23はやや平坦な底部より体部が斜め上方に向かって伸びている。調整は底部外面はヘラオコシ後、丁寧なナデ。底部内面の仕上げにはナデが施されている。法量は口径9.7cm、器高3.35cmを測る。これら蓋坏のセット関係は口径等から推定すると、坏蓋19～坏身22か23、坏蓋20～坏身22か23、坏蓋21～坏身28と考えられる。

24は壺である。平底を有し、体部は丸みを帯びている。底部から体部中央部にかけて回転ヘラケズリが施されており、体部の刺突文と頸部の波状文をもたないタイプである。法量は口径9.4cm、底径3.5cm、器高11.0cmを測る。壺A7・A8型。

25は長頸瓶である。底部は平坦で、肩部は張り、頸部から口縁に向かって緩やかに広がるものである。調整は底部から体部下半にかけてが回転ヘラケズリ、口縁のややドがった位置に沈線が施されている。底部外面に刺突文をもつ。口径8.0cm、器高17.7cm、底径5.8cmを測る。長頸瓶1型。

豪道・玄門部出土遺物（第9図）

遺物は総て須恵器である。26は口縁内面にかえりをもつタイプの坏蓋であり、頂部にはつまみをもつ。つまみ部は円盤状の粘土を貼り付け、その中央を強くナデつけることで輪状に仕上げている。調整は天井部外面が回転ヘラケズリ、天井部内面の仕上げにナデが施されている。口径10.9cm、器高2.2cm、最大径13.0cmを測る。B1型。27は坏身であり、26に伴うものと考えられる。平坦な底部より体部がやや開き気味に立ち上がり、口縁は一度内傾した後外反する。底部外面の切り離しはヘラオコシ後ナデ、底部内面の仕上げにはナデが施されている。口径11.8cm、器高3.2cm、底径7.0cmを測る。28は立ち上がりをもつ小型の坏身であり、口径等から推定すると玄室内出土の坏蓋21に伴うものと思われる。底部外面はヘラオコシ後、軽いナデが施されている。外面の体部下半には、ヘラオコシの際に工具が当たったと考えられる砂粒の動きが観察できる。口径10.0cm、器高3.4cm、最大径12.6cmを測る。A8型。

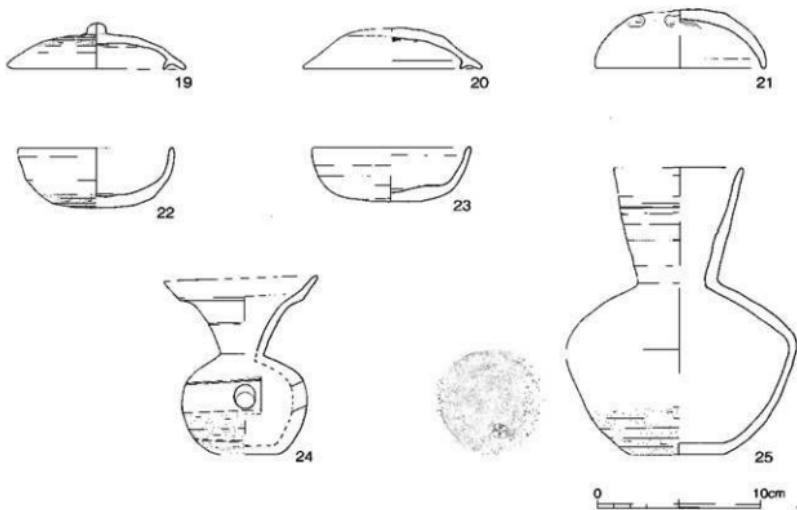
前面部出土遺物（第10図）

遺物は総て須恵器である。29・30は小型の坏蓋である。29は天井部と体部の境に沈線が施されており、天井部のややドがった位置に、ヘラオコシの際に工具が当たったと考えられる砂粒の動きが観察できる。口径10.0cm、器高3.3cmを測る。A8型。30は天井部と体部の境がなくなり、全体が丸みを帯びている。口径10.6cm、器高約3.6cmを測る。A8型。31は口縁部内面にかえりをも

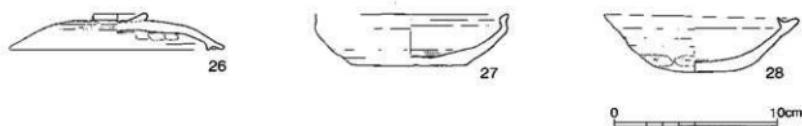
つタイプの坏蓋であり、頂部には輪状のつまみをもつ。つまみの断面形は三角形を呈し、シャープな印象を与えるものである。調整は大井部外周に回転ヘラケズリが施されている。口径13.0cm、器高3.0cm、つまみ部径4.4cm、最大径15.0cmを測る。第8層の淡褐色土層より出土した。B1型。32~34は立ち上がりをもつ小型の坏身である。法景は32が口径8.7cm・最大径12.0cm、33は口径8.9cm・器高3.1cm・最大径10.9cm、34は口径9.2cm・最大径11.4cmを測る。A8型の坏蓋に伴うものと考えられる。35は高台をもつ坏身である。「ハ」の字に開くやや長めの高台が貼り付けられており、体部は内湾しながら開き気味に立ち上がる。底部の切り離しは欠損のため不明である。口径14.9cm、器高5.0cm、高台径8.2cmを測る。これら蓋坏のセット関係は口径等から推定すると、坏蓋29・30・坏身32~34、坏蓋31・坏身35と考えられる。

36は長頸瓶である。肩のあまり張らない球形に近い体部をもち、頸部から口縁に向かって緩やかに広がるものである。調整は底部が回転ヘラケズリ、体部下半がタタキ、上半にかけてがカキメ、口縁のやや下がった位置に2条の沈線が施されている。長頸瓶1型。前庭部の地山直上より出土している。口径9.7cm、器高24.7cmを測る。

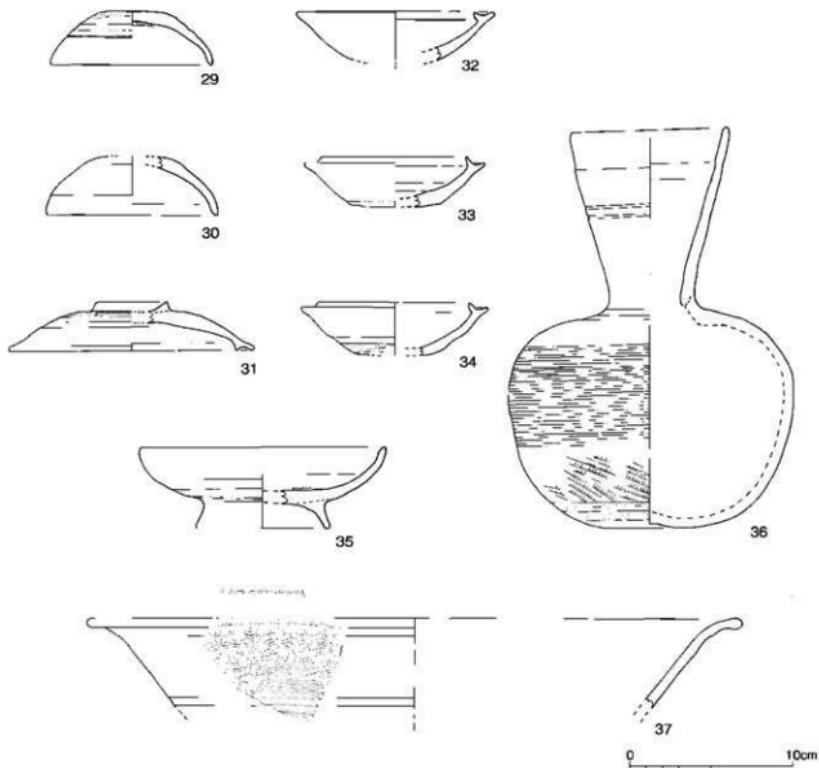
37は壺口縁部の破片である。大きく開き気味に立ち上がり、端部で外反する。口縁外面には波状文が施されている。小片のため径の復元は不正確であるが、40cmを超えるものである。



第8図 3号穴玄室内出土遺物実測図 (S=1/3)



第9図 3号穴通道・玄門部出土遺物実測図 (S=1/3)



第10図 3号穴前庭部出土遺物実測図 (S=1/3)

第4章 まとめ

今回の岩屋口横穴群の発掘は、昭和39年に破壊された横穴2基（1号穴・2号穴）と未開口の横穴1基（3号穴）の調査を行っている。ここでは若干の補足説明を加えまとめとしたい。

1・2号穴については道路法面に残存する玄室の一部の調査であった。玄室の平面プランは外輪谷12号横穴墓や原ノ前横穴墓でみられるような不整形のものではなく、方形プランのものである。玄室の現状での規模は1号穴が南北2.65m、東西1.75m以上、2号穴が南北2.25m、東西2.70mを測る。これは隣接する3号穴の規模（奥行き162cm、幅175～190cm）と比べるとかなり大きく、村内の横穴墓としては最大級のものである。但し、横穴墓が破壊されてから道路法面に剥き出しの状態で19年の歳月が経過している。また、地山が風化した花崗岩（いわゆるマサヒ）であることを考えると、横穴墓が造當時の規模を保っているかどうかは判らない。保管されている須恵器の中で古いものに大谷編年出雲3・4期頃の須恵器壊蓋（第4図1）がある。摩滅した小片であり、横穴に伴う遺物ではないように思われる。玄室内出土と考えられる遺物は第4図3・5・6・7・8の5点である。この内、古いものは第4図5・6の出雲6期の坏身2点、新しいものは第4図7・8の出雲8期の坏身である。これらのことから出雲6期～8期頃に機能していた横穴墓と思われる。この他、遺物の中には中世須恵器5点、壺器系壺甕類胴部の破片6点も含まれており、横穴墓以外の遺構も存在していたと考えられる。

3号横穴墓は意字型の横穴墓であり、玄室の断面は家形、天井部は四注式で平入りに加工されている。頂部には大棟が表現されており、四壁と天井部の境界には軒が巡る。四壁は内側にやや傾斜しながら立ち上がり、天井部へ続く。床面のほぼ中央には溝が掘り込まれており、玄門へと統いている。玄室内から出土した須恵器7点は出雲6期と考えられるものであり、玄門部から出土した須恵器3点についても出雲6期に含まれるものであった。人骨が複数体出土していることから初葬時の遺物と追葬時の遺物が存在すると考えられるが、出土状況等から明確に区別することはできなかった。前庭部からは出雲6期の蓋壺（第10図29・30・32～34）の他、出雲6B・7期頃の壊蓋（第10図31）も出土している。出雲6期の壊蓋29は小型であるが肩部に沈線が施されるなど古手の要素をもつ。また、地山直上より出土した長頸瓶第10図36は玄室内出土の長頸瓶第8図25と比べると体部が球形に近い。同じ長頸瓶1型に属するものであるが若干占い様相を呈しており、これらが初葬時に伴うものかもしれない。出雲6B・7期頃の壊蓋31については恐らく追葬か墓前祭祀に関連した遺物と思われる。これらのことから、3号穴は出雲6期の早い段階から出雲7期にかけて機能していた横穴墓と考えられる。

以上、岩屋口横穴墓群の時期について若干触れた。村内において横穴の調査例はあるが、桑並川の谷筋においては初めての発掘調査であり、今後当地域の歴史を考える上で貴重な資料になると考える。

[註]

- 註 1 「遺跡目録」八雲村教育委員会 昭和43~47年 (P-1)
- 註 2 『島根県史』四「古墳」島根県内務部島根県史編纂掛編纂 大正14年(1925)4月 (P-1)
- 註 3 大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地成色」『島根考古学会誌第11集』島根考古学会
1994年3月 以下、須恵器の分類・時期はこれによる。(P-1)
- 註 4 西尾克己氏のご教示による。(P-4)
玄室内の人骨の近くに置かれた須恵器によくみられる付着物であり、脂質が溶けだして膠のようになったものらしいが詳細は判らない。3号穴の人骨付近から出土した須恵器(第8図20・23・24)にも同様の付着物が認められる。
- 註 5 八雲村文化財調査報告3『八雲村の遺跡』八雲村教育委員会 1978年3月 (P-4)
- 註 6 山陰横穴墓研究会「横穴墓の構造と名称」「出雲の横穴墓」
-その型式・変遷・地域性- 第7回横穴墓調査検討会 1997年 (P-7・13)
- 註 7 人骨取り上げ時の尖端部に記載されていた。
鳥取大学医学部医学科形態解析学医学科長井上貴先生のご指導で取り上げを行っている。(P-7)
- 註 8 八雲村文化財調査報告14「一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告1」
『安田古墳群1号墳・外輪谷横穴墓群12号穴』八雲村教育委員会 1999年3月 (P-13)
- 註 9 東森市良「原の前横穴」八雲村文化財調査報告3
『八雲村の遺跡』八雲村教育委員会 1978年3月 (P-13)

[参考文献]

- ・島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書、-和田園地造成工事に伴う発掘調査- 1984年3月
- ・山陰考古学研究会「石棺式石室の研究」古代の出雲を考える6 1987年

岩屋口3号横穴墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第2講座

井上貴央

1. はじめに

岩屋口3号横穴墓は島根県八雲村に位置する横穴墓であり、伴出する須恵器から7世紀のものであると考えられている。検出された人骨は保存が良好であるといいがたく、人類学的な計測に耐えうるものは少ないが、ここにその概略を報告する。稿をはじめにあたり、本人骨の研究の機会を授えられた八雲村教育委員会の各位、とりわけ人骨の取り上げや実測図の作成などでご協力いただいた同教育委員会の宮本徳昭氏にお礼申し上げる。

2. 人骨の検出状況

人骨の検出状況を図1に示した（図中の数字は取り上げ番号である）。骨の保存状況は極めて悪く、ほとんどすべての長幹骨の骨端は風化消失てしまっている。このため、身長推定をおこなえる保存良好な長幹骨は1点も存在せず、検出人骨からの身長推定は不可能である。検出された人骨は頭蓋骨の一部と大腿骨や脛骨などの下肢骨が多く、椎骨などの海綿質の骨は1点も認められない。

検出された人骨は数体あるが、原位置を保っているものは、1体も存在しない。玄室入口の土層観察からは少なくとも3回の玄室の開閉があったと考えられ、数次にわたる埋葬が行われていたことが考えられる。検出された須恵器にはほとんど時期差は認められない。玄室内の壁を観察すると、かつての水位を示すレベルが3条認められ、少なくとも3回にわたって玄室が水没したのは確実である。本横穴では、骨が散在した状態で検出されているが、人為的な骨の移動に加えて水没による骨の移動があったものと思われる。

玄室内の須恵器の配置をみると、いわゆる「枕」と考えられるものは、漢道からみて右奥に位置する3個の蓋壺のみであって、他の須恵器には枕となりうるものはない。この他に、刀子などの鉄器などの遺物が検出されているが、人骨の配列と積極的な関係を示すものは存在しない。

3. 検出人骨の記載

検出された主な人骨のリストを表1に示した（番号は取り上げ番号であり、図面の番号と対応している）。

頭蓋骨は本横穴墓から4体分検出されている。まず、漢道からみて、右奥には、2体分の頭蓋骨がある。一つは壮年前半の女性のもの（第1頭蓋）であり、もう一つは子供のもの（第2頭蓋）である。玄室入口付近には壮年～熟年女性の頭蓋骨（第3頭蓋）と青年の頭蓋骨（第4頭蓋）が各1点検出されている。

第1頭蓋は、前頭骨、頸頂骨、後頭骨、右側頭骨、左側頭骨、上顎骨からなり、これらは接続可能であった。組み立てられた頭蓋骨は、左右の側頭部の一部、顔面頭蓋の一部を欠くが頭蓋骨はほぼ完存している。破損のため頭型の計測は出来ないが、短頭に属するものと思われる。前頭部はよく膨隆しており、眉間の隆起は著しくないこと、また、眉弓の発達が良くないことから判断して本頭蓋骨は女性のものであることは間違いない。上顎骨に釘植している歯牙は、右側では、側切歯、

犬歯、第1小白歯、第1大臼歯であり、左側では、犬歯、第2小白歯、第1大臼歯である。その他の歯牙は脱落してしまっており、歯槽を残すのみである。歯牙の咬耗はあまり進んでおらず、Martinの0～1度であり、本頭蓋が若年者のものであることを示している。三主縫合は内板、外板ともに癒合閉鎖をきたしていない。口蓋縫合蓋骨部はまだ閉鎖をきたしていない。このことから、本頭蓋は壮年前半の女性骨であると推定される。

第2頭蓋は、前頭骨、右頭頂骨、左頭頂骨の部分が検出されている。また、この頭蓋に該当する歯が近傍から検出されている。歯は3本である。それは右上顎の犬歯、第1または第2小白歯、第2乳臼歯で、前2者の歯は歯根が未形成である。歯根の形成状況や歯の萌出状況から判断すると、本頭蓋は5歳程度の個体であると考えられる。

玄室入口近くから検出された第3頭蓋は、右側頭骨、右頭頂骨、前頭骨からなり、接合可能であった。組み立てられた頭蓋は主に頭蓋の右半分であり、左の脳頭蓋および顔面頭蓋を欠いている。冠状縫合は外板は癒合閉鎖をきたしていないが、内板は癒合閉鎖をきたしている。乳様突起は小さく、全体の印象から判断すると女性骨であって、年齢は壮年～熟年のものと推定される。

第4頭蓋は、右の頭頂骨と前頭骨からなる。内板、外板とともにまだ癒合閉鎖をきたしておらず、全体の大きさが小さいことから判断して青年期の個体と考えられる。

下顎骨は2点検出されている。1点はほぼ完形であるが(No.16)、1点は保存不良で大きく二つに割れている(No.35)。保存良好な方の下顎骨の右側には第1大臼歯が、左側には第2小白歯から第2大臼歯にかけての歯牙が釘植している。その他の歯牙は脱落してしまっている。歯牙の咬耗はかなり進んでおり、Martinの2～3度である。骨体は重厚であるが、全体の形態から判断すると女性骨である可能性が強い。保存不良の下顎骨の右側には第1～第2大臼歯が、左側には第2小白歯～第3大臼歯が釘植していたようである。華奢で女性の下顎骨らしく咬耗はあまり進んでいない(Martin 0～1度)。

四肢骨をみると、先にも述べたように上肢骨の検出個数は下肢骨のものに比べて極めて少ない。同一個体の左右と考えられる大腿骨、脛骨などが無秩序に散布しており、埋葬後なんらかの理由で骨が動いていることが示唆される。上腕骨では左が1点検出されている。この上腕骨は太くて三角筋粗面が発達しているので、男性のものと考えられる。尺骨では左側のものと考えられる尺骨片1点が検出されているのみで、桡骨は右側が1点検出されているのみである。

脊柱を構成する骨は1点も検出されていない。もともと椎骨は残り難く、本横穴墓のように水没痕が認められる横穴墓では検出されることはない。骨盤の骨では腸骨が3点検出されており、そのうち2は左右の対である。

下肢骨では右大腿骨が3点、左大腿骨が4点検出されている。このうち3組は同一個体のものであると識別することができた。脛骨では右側が3点、左側が3点検出されている。このうち3組は同一個体のものである。下肢骨の性別は表1に示すとおりである。

4. 本横穴の被埋葬者数と年齢性別

本横穴から検出された人骨をもとに、被埋葬者の数、年齢、性別について言及したい。本横穴墓の場合、骨の残りが悪く、また、骨の移動が認められたので、正確な被埋葬者を特定することは極めて困難である。次に述べる被埋葬者数は検出人骨からみた最小埋葬個体数であって、実際の被埋葬者数よりも少ない可能性があることを承知おき願いたい。

まず、頭蓋骨からみると、壮年前半の女性の頭蓋骨が1点、壮年～熟年の女性の頭蓋骨が1点、

5歳程度の子供の頭蓋骨が1点、青年期とみられる子供の頭蓋骨が1点検出されている。大軀骨で算定すると、同一個体に属する女性骨が2体、男性骨(?)が1体、子供が1体検出されている。脛骨では、女性骨が2体分、男性(?)が1体分検出されている。

従って、本横穴墓の埋葬者は、男性(?)が1体、女性が2体(壮年前半1体、壮年～熟年1体)であると考えられる。

次に、子供の埋葬者についてであるが、頭蓋骨からみると先にも述べたように2体の子供の骨が確認されている。その年齢は頭蓋の大きさや歯の形状から推定して、5歳程度のものと青年期のものであると考えられる。

5. 要約

- 1) 岩屋口3号横穴墓から検出された人骨は保存状況は良好とは言い難く、人類学的な計測に耐える骨はほとんど検出されていないが、埋葬者数などの点において、若干の知見を得た。
- 2) 検出された人骨は、もとの埋葬位置を保っているものとは考えがたく、ほとんど全ての骨がなんらかの移動を受けている。その原因として、人為的な移動に加えて、玄室内に過去に水が流入したことも一因と考えられる。
- 3) 検出された人骨は壮年前半の女性が1体、壮年～熟年の女性が1体、年齢を特定できない男性骨が1体、5歳程度の子供が1体、青年期の子供が1体の合計5体である。



第1 頭蓋の右側面観と正面観

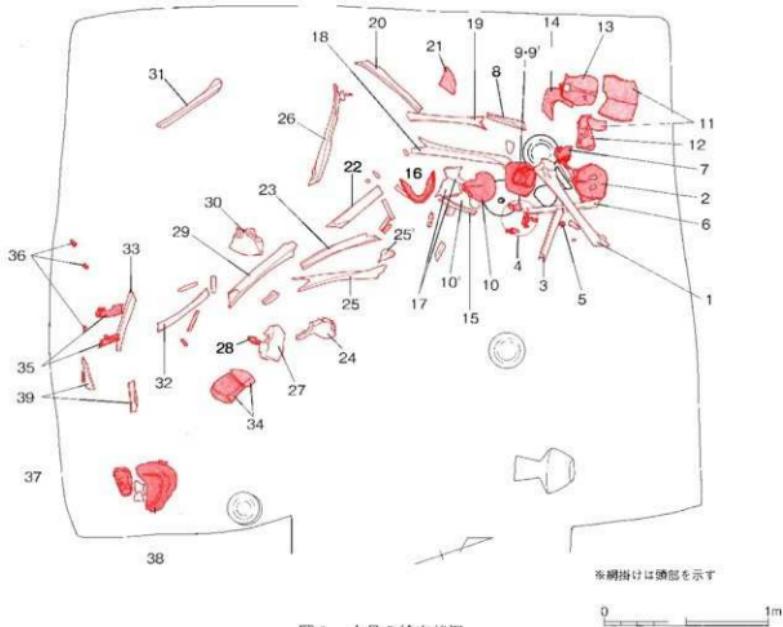


図1 人骨の検出状況

表1 人骨リスト

番号	部位	備考	番号	部位	備考	番号	部位	備考
1	大腿骨(左)	18と対	13	後頭骨	第1頸蓋	26	大腿骨(右)	29と対、男?
2	前頸骨		14	頸蓋骨	第2頸蓋	27	脛骨(右)	30と対
3	軀骨(左)	20と対、女	15	腓骨(右)		28	腓骨(右)	
4	椎体、前頭骨片		16	下頸骨		29	大腿骨(左)	26と対、男?
5	歯牙	3本	17	肩甲骨(右)		30	脛骨(左)	27と対
6	脛骨(右)	23と対、女	18	大腿骨(右)	1と対、女	31	脛骨(右)	22と対、男?
7	上顎骨		19	人顎骨(左)	32と対、子供	32	大腿骨(右)	19と対、子供
8	大腿骨(右)	幼児	20	脛骨(右)	3と対、女	33	上腕骨	男?
9	側頭骨		21	骨片		34	脛骨(右)、前頭骨	第4頸蓋
9'	頬頭骨(左)	第2頸蓋	22	脛骨(左)	31と対、男?	35	下頸骨	
10	前頸骨	第2頸蓋	23	脛骨(左)	6と対、女	36	歯牙	
10'	歯		24	脛骨(右)		37	側頭骨	第3頸蓋
11	頭頂骨	第1頸蓋	25	大腿骨(左)	女	38	頭頂骨、前頭骨	第3頸蓋
12	側頭骨	第1頸蓋	25'	大腿骨、骨頭	女	39	上腕骨?	

図 版



発掘調査前の岩屋口横穴墓群



発掘調査後の岩屋口横穴墓群

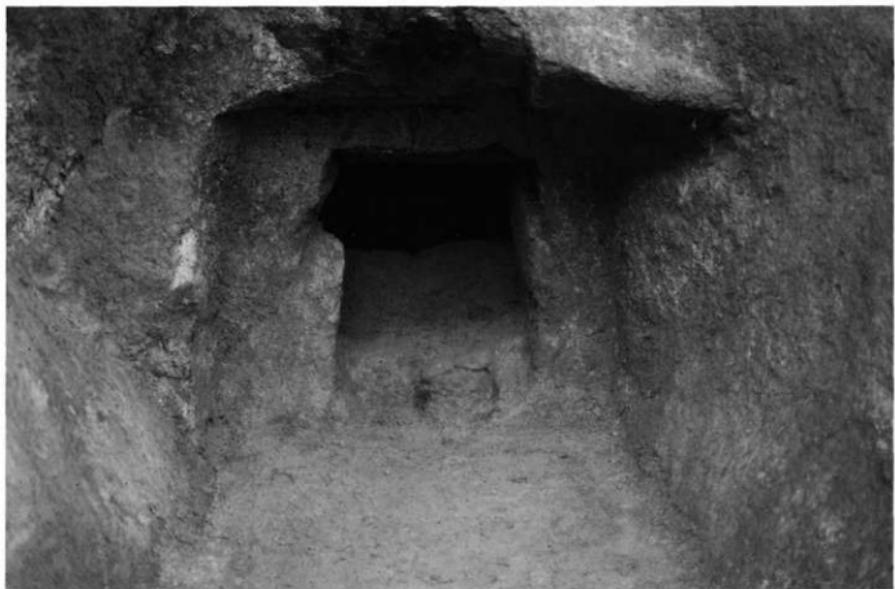
図版 2



岩屋口横穴墓群 1号穴 全景



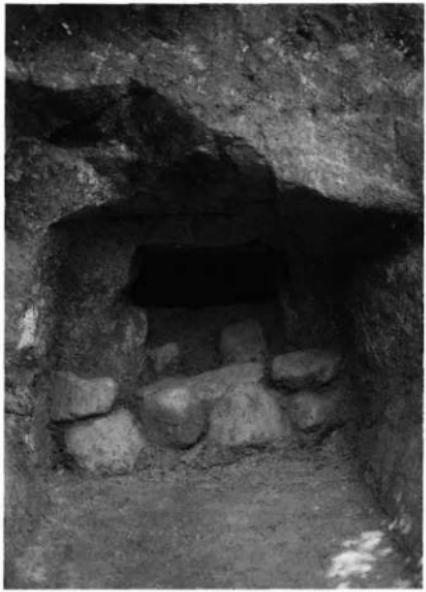
岩屋口横穴墓群 2号穴 全景



岩屋口横穴墓群 3号穴 全景



岩屋口横穴墓群 3号穴 土層堆積状況



岩屋口横穴墓群 3号穴 閉塞石検出状況

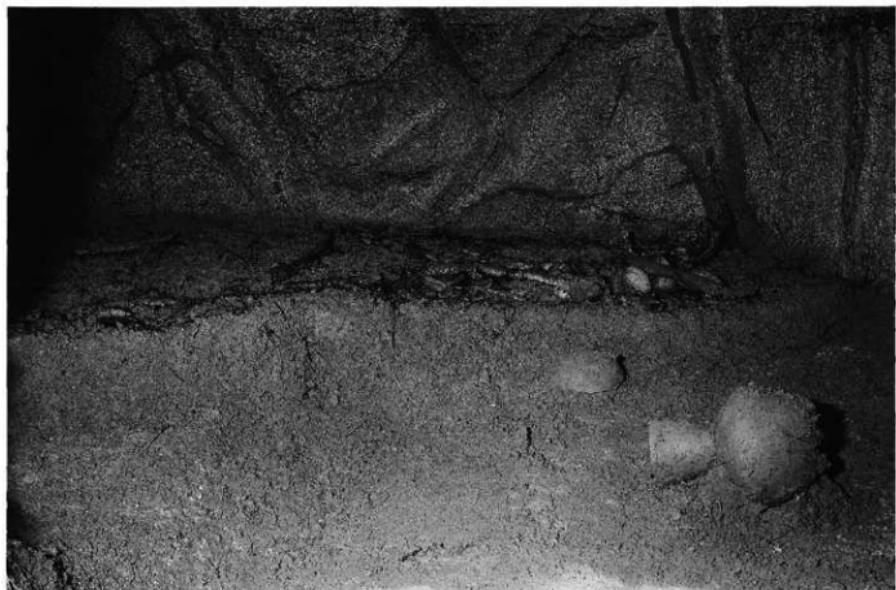
図版 4



岩屋口横穴墓群 3号穴 前庭部遺物出土状況



岩屋口横穴墓群 3号穴 羨道・玄門部遺物出土状況

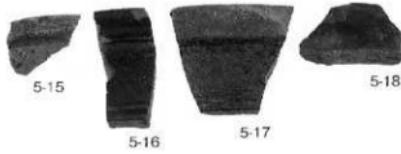
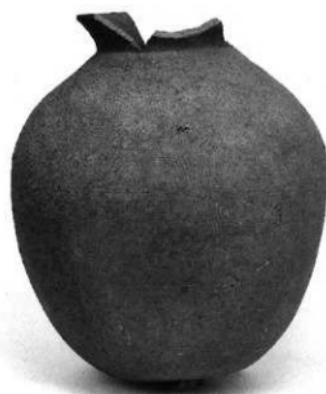


岩屋口横穴墓群 3 号穴 玄室内遺物出土状況



岩屋口横穴墓群 3 号穴 玄室内遺物出土状況

図版 6





報告書抄録

ふりがな	いわやぐちよこあなばぐん					
書名	岩屋口横穴墓群					
副書名	昭和58年度村役場深原線(桑下)道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次	松江市文化財調査報告書第108集					
編集者名	川上 昭一					
編集機関	松江市教育委員会					
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町86 TEL (0852) 55-5284					
発行年月日	平成18(2006)年12月					
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間
		市町村	遺跡			
岩屋口横穴墓群	島根県松江市八云町西岩坂	32201	F 7	35度24分2秒	133度5分33秒	昭和58年 9月24日～ 10月8日
調査原因	村役場深原線(桑下)道路改良工事					
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
岩屋口横穴墓群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	須恵器	3号横穴から人骨5体分を確認。	

岩屋口横穴墓群

平成18（2006）年12月

発行 松江市教育委員会
島根県松江市末次町86

印刷 ㈲高浜印刷
島根県松江市東長江町902-57